高野太輔著

『アラブ系譜体系の誕生と発展』（山川歴史モノグラフ16）

山川出版社，2008年11月，174+47頁，定価5,000円+税

医 王 秀 行^{*}
IOH Hideyuki

初期イスラム史研究にとってアラブ部族社会の歴史理解は不可欠のものである。メッカのクライシュ族出身のムハンマドがメディナを拠点にイスラムの勢力を拡大するにあたっては、周辺の様々なアラブ諸族との関係構築が最重要課題であったと言っても過言ではない。正統カリフ時代の大征服活動や、バスラ、クーファといった軍営都市への移住は部族単位で行われたことが知られている。ウマイヤ朝時代の諸反乱やアッバース家の革命運動ではどういった部族が関わっていたのかが研究上大きな問題となってきた。しかし、こういったアラブ部族の研究には困難な点も多い。部族は固定的で不可分の集団ではなく、大きな集団は時代を経るにしたがい中小の集団に分岐していくことが当然予想される。タミーム、アズドなど初期史料に頻出する集団も、ジャーヒリーヤ時代とウマイヤ朝時代では、居住地、集団規模、支族構成、生業はかなり異なってくる。そしてまた、個々の部族が血縁の紐帯にもとづく一枚岩の集団であったというのも幻想のようである。ムハンマド時代のメッカ周辺を例にとってみても、ハリーフと呼ばれる外部出身者、都市商人、遊牧民などが混在し、クライシュ族は実は地縁的な集団だったのではないかという観測も一部ではある。

アラビア半島にイスラムの覇権が確立し、アラブが一体となって征服事業に乗り出した後になって、クライシュ族を中心軸とする系図が整備されていったであろうことは、おおよそ推測できる。自らの所属する集団が系譜上どこに位置し、ムハンマドやクライシュ族といかなる姻戚関係や歴史的な関わりがあったかについて、個々のアラブは大きな関心を寄せたはずである。そして、アラブ部族間の血縁関係を示す系譜は、系譜学者や部族有力者の手により人為的な操作、変更が加えられ、構築されていったらしいことについて、一部研究者の間では半ば当然のこととして受け止められてきた。ただし、系譜学者がいかなる人為的な操作を系譜に施したかについて、史料から実証した歴史研究はほとんど見当たらなかった。筆者（以下高野）が長年の研究成果をまとめた本研究書は、こういったアラブの系譜の成り立ちについて鋭い分析を加えた画期的研究である。

* 東京女学館大学教授
Professor, Tokyo Jogakkan College

本書は理路整然と論旨がまとめられ、精緻にして堅実な内容となっている。歴史用語の選択にあっては細心の注意が払われ、曖昧な用法を避けるべく慎重に吟味されたことがうかがえる。普段我々が何気なく使い、評者（医王）もすでに上で用いた「部族」という言葉にしても、本書ではほとんど用いられず、もっぱら「集団」「系譜集団」といった語が用いられる。部族という言葉からは、一般に、血縁関係を拠りどころにした排他的で未開の集団を思い浮かべる傾向があることに考慮したためかもしれない。こういったことから批評する側にとっても、用語を選ぶに当たっては慎重さが要求される。そしていつの間にか、高野の用語法に引きずられ、同じような表現を繰り返していることに気づく。よって評者としては、読む側の分かりやすさも考慮し、自分なりに常識的な線と思われる表現を以下では用いることにしたい。よって高野から見れば曖昧で不適切な表現が多々あるかもしれないことをまず断っておく。内容を概観すると以下のようなものである。

「序」

ここではアラブという集団の捉え方、「部族」の枠組み、構造について、高野の問題意識や、内外の研究史が簡潔に無駄なくまとめられている。アラブとは何かという根源的な問いかけから始まり、もともとアラブ社会が「血縁にもとづく集団化論理」が強く働いた社会であったことを指摘する。そしてこの論理がイスラム的な原理にとって代られることで衰退していったとみなす点は示唆に富む。アラブの「部族」に関する研究については、高野の解説が実に要領よくまとまっており、ここで煩雑な解説を繰り返すことは避けたい。ただし、部族というものが「恒常的に維持される絶対的な枠組みではなかった」ことが、近年の学界で了解されている点については、強調しておいてよいであろう。

高野は系譜学書の内容がフィクションの産物であることをはっきりと認める。ただしそこに史料的价值が無いわけではなく、「アラブの系譜集団が実際にたどってきた分裂と融合の歴史」が、系譜上での「血縁的な疎遠関係」の中に反映されていると指摘する。そして人為的な系譜学の作業を歴史的にさかのぼって検証することで、「アラブ系譜集団の本来の姿」を再現するという明確な目標が提示されている。系譜学書のみならず、様々な分野の史料のアプローチを集積することで、かつてのアラブ社会の本来の姿は見えてくることだろう。

第一章「アラブ系譜集団の構造的特徴」

この章は、後に続く章に比べるとかなりのページ数を占めている。アラブの名前にについての基本的知識が整理されており初学者にも有益であるが、イスラム史の専門家にと

っても常識として知っておくべき情報が丁寧に説明されており、眼から鱗の解説も多い。忙しい向きにも、とりあえずこの章だけはまず一読し、イスラム史研究者としての基本的素養を身につけることをお勧めしたい。

「1 アラブの系譜システム」においては、アラブの場合、男も女も系譜は基本的に父系で表わされることが強調される。女の場合も、自分のイスマの次に「ビント（娘）」の語が来て、あとは父方の先祖（男）のイスマが系譜としてたどられる。母方の系譜、女性の先祖が当人の出自を説明するに重要な場合も当然あり得るが、それは本人の名前（本人のイスマと、父方の先祖のイスマをさかのぼって羅列したもの）とは別の情報として史料では補足的に説明されるのである。

アラブの系譜は原則として人類の始祖アダムにまでたどれるように作られてある、と評者もそう理解していたが、本書によればこれ正確ではない。実際のところムハンマドからアダムにさかのぼる系譜のうち、アラブの系譜学で知識として確定されているのはムハンマドからアドナーンにさかのぼる22代までであり、それより古い世代になると学者間の異論もあって知識はあいまいとなり、最後のイスマーイールからアダムに遡る21代については旧約聖書をまるごと写したものがあるという。

人間が皆、アダムの子孫であるという概念はイスラム化以後、全ムスリムに共有されるのはもちろんのことであるが、アッバース朝時代になって整備されたアラブの系譜学とは、個々のアラブについて、北アラブ（預言者ムハンマドを含む）の先祖アドナーンや南アラブの先祖カフターンにさかのぼる系譜を確定する仕事であったことがここで了解される。

アラブは「バヌー・某」と呼ばれる集団に属する。某は祖先の名前だが、何代前の祖先を名乗るかは「可変自在」である。ムハンマドは「バヌー・ハーシム」の一員であり、かつ「バヌー・クライシュ」「バヌー・キナーナ」にも属している。ただし高野によれば、先祖であれば誰の名前を採ってもよいわけではなく、一定の制限があったという。各部族の名祖となる条件とは何なのか、いずれ、いろいろな部族の用例を集めて整理する試みがあってもよいだろう。

「2 アラブの系譜体系」では、アドナーンを祖とする北アラブと、カフターンを祖とする南アラブの代表的な部族について扱われる。ジャーヒリーヤ時代から預言者ムハンマドの時代を経て、アッバース朝時代に至るまで、各部族の原居住地、イスラム勃興時の動向、大征服に伴う移住、反乱、分派活動や部族間抗争への加担など、各部族の歴史が簡潔に要領よくまとめて紹介されており、特に初期イスラム史を研究する者には便利な情報が多く、ありがたい。

第二章「アラブ系譜学の誕生と発展」

「1 系譜学の黎明期」では、初代カリフのアブー・バクルなど、アラブの系譜に詳しい人物の逸話が紹介され、アッバース朝時代に入ってから本格的に系譜学書が編纂されていくことを知る。「2 ヒシャーム・ブン・アルカルビーと『大系譜書』」では、『偶像の書』の著者でもあるヒシャーム・ブン・アルカルビー（819年没）による本格的なアラブの系譜書『大系譜書』について詳説される。初期イスラム史の研究においては、カスケル W. Caskel の *Ġamharat an-Nasab* (2 vols. Leiden, 1966) が必携である。これは、系図と人名・部族名索引からなる2冊の大著であるが、カスケルが依拠しているのがこの『大系譜書』である。『大系譜書』の4種類の写本の存在や、複雑な系譜を記述していくに際してヒシャーム・ブン・アルカルビーが採用した「折り返し法」について説明がある。「3 系譜学の継承」では、ヒシャーム・ブン・アルカルビー以降の代表的な系譜学書について知る。初期イスラム史を専門とする者にとっては、いずれの書も所持して頻繁に用いるにふさわしいものばかりであり、ここで基本的な情報が整理されているのは有益である。

第三章「系譜と婚姻」

系譜学書においては、イスラム期以降の世代については比較的確かな情報が残されていると考えられるが、伝説的な名祖の時代やジャーヒリーヤ時代については、後世に創作された部分がかかなりあると思われる。第三章以降はこうした系譜操作のあり方が論じられる。本書の学問的な価値の高さは、第三章から第五章にかけての論述において見ることができる。ただし、やや難解になるのはやむを得ないところだろう。第三章は読むのに覚悟がいる。系図、図表がちりばめられ、いかにも難解そうである。読んでみると最初は確かに難解である。ただし、論旨を整理してみると、ラビーア族が外部の部族と姻戚関係を持つ場合、上の世代（古い世代）では、系図の上では、自分たちよりも比較的下の世代と姻戚関係を持ち、下の世代（新しい世代）では、系図の上では、自分たちよりも比較的上の世代と姻戚関係を持っているということであり、さほど複雑ではない。そしてラビーア族の支族（系図の下位集団）のバクル・ブン・ワーイル族、タグリブ族の系譜が、後に、何らかの意図によって4世代ほど繰り下げられたという結論が導き出されている。ただし、系譜操作が行われた理由についてははっきり言及されていない。

第四章「系譜集団の分岐法」

この章は、例によって少しまわり道するものの、論旨は非常に明快である。タグリブ族やバクル・ブン・ワーイル族の系譜がラビーア族の系譜の中に後世、人為的にはめ込まれたように、社会的に実態のある部族集団が系譜の下位に、あるまとまった系譜集団として組み込まれていったことを論じる。北アラブの系譜において、縦に分岐していく

「階層構造」が多い点は、「叔父の一族」として様々な集団を系譜の下から上に順に積み上げていったためとみなす。系譜の統合が人為的な操作により組み立てられ、こういった系譜が確定するのがアッパース朝時代であったことから、ウマイヤ朝ではラビーア族、カイス・アイラーン族といった大きな集団ごとの枠組み、帰属意識は存在したものの、より下位の集団（つまり支族）が系譜の上でどこに位置づけられ、互いにどういった関係にあったのかについての知識はアラブに共有されていなかったという結論が導き出されている。

ここでは、南アラブがなぜ横に広がる「等位構造」の系譜を持つかについては、詳しい説明は避けられている。

第五章「母祖の提供と系譜統合」

アラブの系譜は父系であり、男性の先祖を順次さかのぼって行くものであるが、系譜の途中で他部族出身の母祖に言及される場合も多々ある。この事実に関しては、従来、他部族との姻戚関係を強調するためのものであり、多分に政治的要素が含まれていると考えられてきた。しかし高野によれば、部族間の近親関係を強調すべき合理的理由がない場合も多いという。そこで高野が論ずるのが、系譜を人為的に作り上げていく過程で架空の父祖が新たにいくつも設定され、それと同時に、他のある一つの部族から便宜的に母祖を一斉に拝借してきたのではないかという説である。逆に、同一部族から母祖の提供を連続して受けている箇所があれば、そこに後世の学者による人為的な父祖の継ぎ足し、作為のあとを見ることも可能ということになる。ラビーア族の場合、クダア族から母祖を拝借し、次にイヤード族から拝借しといった具合に、二段階にわたって系譜が整理されたという。以上の結論は明快であり、評者にはアラブの系譜は想像以上に人の作為の所産であるという感想を得た。

「結」

高野によれば、ラビーア族という大きな枠組みからなる集団意識、同族意識は初期の大征服時代には漠然としてではあるがすでに存在していた。しかし、どの支族が系譜のどこに位置づけられるかといった血縁集団としての内部構造や、それに伴う系譜意識がはっきりと確定するのはずっと後世のことであるとする。むしろウマイヤ朝時代は、社会的状況に応じて部族間の連衡が繰り返されて、系譜意識も融通無碍に変化が見られたようである。アッパース時代になって系譜学が確定するのは、アラブ帝国の瓦解に伴う、系譜集団の形骸化が背景にあるとする結論は秀逸である。

本編のほかに、「附論」が3編ある。今後、研究テーマになりそうなヒントも多く含まれており、紹介しておこう。

「附論 1 系譜集団の単位性」

「(1)系譜集団を意味する語句」では、カビーラ、バトン、ハイイなど、親族集団を表す用語について、アラビア語の初期史料から用例を紹介しながら、意味する範囲を整理している。系譜を扱う上では当然避けては通れない作業であろう。「(2)系譜の組み換え」では、特定の個人、集団が系譜を移し変えていた事例が紹介されるが、実際に行われた時代ははっきりしないとされる。「(3)名祖の起源」では、タミームなど従来、男性先祖名と考えられてきた部族名が、実はそうではなく、「クライシュ」にみられるような地縁集団の名称、あるいはその他の集団名称であったとする学説を紹介しており、興味深い。

「附論 2 母系の記述法」

父系が原則の系譜にも母親の名が現れることがある。高野が言うように、アラブ社会では、「系譜上の血筋と実際の生活集団が異なるケースも珍しくなかった。」また、預言者ムハンマドなど重要人物の場合は、母方の系譜も網羅的に紹介されることを示している。ムハンマドの先祖について母系も含めてまとめた表 4、5 は利用価値が高い。

「附論 3 カフターンとアドナーン」では、南アラビアの祖とされるカフターンと、北アラブの祖とされるアドナーン、及びアドナーン族の始祖らについて様々な伝説的逸話を紹介している。

索引、参考文献、註は、無駄なくよく整理されている。地図に諸部族の居住地がおおよそでも入っていればより便利であった。もっとも、居住地を検証、確定するのは実は難しい作業であり、時代によって異動もあるため、慎重を期したのであろう。

以上、おおまかにではあるが、本書の内容を紹介してみた。アラブの系譜や部族の成り立ち、構造については、常々、評者なりにいくつかの疑問を持っていた。本書を読んで疑問点がすっきりと解消して漠然とした知識が再確認できたところもあれば、疑問のまま残っているものもある。蛇足ではあるが、この場を借りて個人的な疑問ではあるが思いつくままに述べてみよう。

初期アッバース朝時代、イブン・アル・カルビーらの学者によって確定されていく系譜の中で、例えば預言者ムハンマドの時代に社会的実態のあった部族、社会集団はどれなのか。北アラブのキナーナ、タミーム、ハワーズィン、南アラブのアズド、タイイといった部族名は、アッバース朝期に成立した歴史書の中で預言者ムハンマドに関わる部族として頻繁に現れるが、ムハンマドの時代の個々のアラブはこうした部族集団、枠組みの一員という自覚はあったのだろうか。歴史家が系譜学の成果をもとに、便宜的に用いた呼称なのではなかろうか。当時は、もっと小さな支族単位にわかれており、大征服

以降、ウマイヤ朝期あたりから、例えば、紅海沿岸に展開していた部族をキナーナ族、半島中央部に居住していた部族をタミーム族と総称するようになったという可能性はないのだろうか。

また、北アラブについては、クライシュ族からみて、キナーナ族、タミーム族、カイス族、ラビーア族の順に系譜上、遠くなるのはなぜなのか。居住地の地理的位置だけではない要素が含まれているのだろうか。南アラブの系譜が高野の言うように、等位構造をとるとしたら、等位におかれる諸部族の並びはいつの時代の社会状況を反映したものであるのだろうか。クダーア族のように政治的要因で北アラブから南アラブに系譜を組み替えた事例もあったというが、部族単位での大征服への参加や軍営都市への移住、部族間抗争、反乱といった歴史がある中で、系譜の統合作業にはこういった歴史、社会的な要素がどの程度まで反映されているのだろうか。

こういった疑問について、実際に、アラブの様々な部族集団がたどった歴史と、系譜との相関関係について仔細に論証しようとすれば、また違った方法論に基づく研究が別個に必要となってこよう。膨大な史料の読みこみが必要となり、大変な労力が予想されるが、だからといって、結果的に、各部族の系譜上での位置づけと部族史との間の因果関係がはっきりすると約束されるわけでもないだろう。

本書について、初期イスラム時代の歴史研究をもっぱら専門とする評者から見れば、当時のアラブ社会の構造、例えば部族の集合・離散、姻戚関係、血縁意識と地縁意識、身分・階層、長の権威の源泉などなど、具体的にもっと踏み込んで語ってほしい箇所は多い。ただし本書はあくまでも、アラブの系譜の人為的な成り立ちを学問的に分析したものであり、「アラブの大征服」「ウマイヤ朝史」といった類の歴史研究とは根本的に異なる以上、これは過剰な要求であろう。本書の記述においては、根拠のない推論は極力避けられ、一貫して慎重な姿勢がとられている。あくまでも文献史料にもとづいて、論証可能な結論を提示することに主眼が置かれており、きわめてオーソドックスな歴史研究であると言えよう。ただし、導き出された結論は独創的、本質的なものであり、イスラム黄金期における学者たちの学問的営みについて貴重な情報に富む。内容的に信頼に値し、今後参照、引用すべき、すぐれた研究業績である。

最後になるが、本書において論証の中心的な対象は北アラブのラビーア族に置かれているが、例えばクライシュ族の系譜においては、何らかの構造的な特徴を見出すことは可能なのか、後世に付加された家系はないのか、人為的な操作が果たして見出せるのかなど、あるいは、メディナのアンサールの系譜はどういった特徴を持つのかについても、今後、より明らかになることを期待したい。